

なかつた事、及び、其の研究方法として採つたものが殆ど全く史的方法に限られて居たと云ふ事に加へて更らに國語の音聲學的知識の缺乏が科學的國語學の成立を妨げて居つた事に基くと云へる。従つて今日の急務は科學的國語學を確立すると言ふ事に存し其の順序として國語の音聲學的性質を明瞭として其の言語學的性質を充分に理解する必要がある。』以上は即ち本書の序説に依つてうかがわれる著者の抱負であり、此の著書の現はれた根本の動機であるが、此れは誠に正當なそして、眞面目な、一般に認められねばならぬ主張であつて平素此の方面に獨特の研究を積まれて居る著者の眞面目な著書として、本書に對し歡迎の意を表したい。本書は前後二篇に分かたれ前篇は「國語の語調」と題し、第一章「標準音と訛音」第二章「連結音及音節」第三章「アクセントの意義」第四章「國語のアクセント形式」第五章「文の抑揚と語のアクセント」の五章を收め、後篇は「國定讀本のアクセント」と題し、先づ發音表記法の一般的注意を述べた後に、國定小學讀本卷一より卷四に至るまで順序を逐つて其のアクセントの標記を試みて居る。今極めて簡単に其の内容を紹介するならば第一章に於ては、國語の標準音として、東京方言のうち最標準的價値の多い教養ある中流人士の發音を採用する所以を述べ、之と地方々々の方言即ち訛音とを興味ある實例を以て比較し、第二章に於ては主として子音の有聲化、母音の無聲化等について簡明に説き、第三章に於てはアクセントの意義を論じ、夫れを大略、音節の有する重みと解して差支無しとなし、かくの如く音系列に於ける一定の輕重關係は如何にして生ずるかの問題に入り、其の要素として、時間的關係(長

き) 強弱關係(強き) 高低關係(高き)の三つを數へ國語に於ては就中「高き」が其の主要素なる事を説いて居る、第四章に及んではかくの如き、高低、換音すれば抑揚關係を主要素とする國語のアクセント形式は如何の問題に進み、實驗的研究の結果から種々の形式を夫々の適切な例に依つて示して居る、第五章は標準的發音たるべき東京語に行はるゝアクセント形式規定の言語心理に關する著者の推定を骨子として、言葉調子即ち文の抑揚關係が語のアクセント形式を規定する所以を力説し、更らに感情の表白と語調從つて語のアクセントとの關係を論じて居る、全體が簡明で要領を得て得る、發音の統一、標準音の普及は著者と共に、吾人も願ふ所であつて、廣く此の書の利用をすゝめたいと思ふ。

尙、注意深い讀者には直ちに判斷のつく事ではあるが著しい誤植として氣のついた點を二三擧ぐれば、三一頁、前かゝ五行目「無聲の子音が無聲の子音に變る」は：「有聲の子音に變る」の誤なるべく、一一一頁、後から四行目「上の高きに：：：：」は「下の高きに：：」の誤であらう、其の外、文意の徹底には別に影響は無いが九二頁の前より七行目「畢音」は「畢竟」の誤九三頁前より六行目「設批評的に：：」は「沒批評的に：：」の誤であらう。東京上駒込心理學研究會出版部發行 定價金八拾五錢。(深田武)

三富義臣君
今井國三君

追悼錄

增田篤夫編

人は畢竟一面に於ては時以上の世界に屬してゐると同時に、他面には何等かの意味に於て時劫の國に屬してゐる者だと言へやう。そして人の死を眼の當り見る事程此の事を今更乍ら深く痛感

せしめるものはない。殊に偉大であつたり前途に嗚すべき望の多かつたりした人が、一見運命の悪戯としか見えぬ様な思はぬ死に方をするのを見た時は一層さうである。さう言ふ時故人は今も尙どこかに生きてゐる様な気がする。もしくはそう信じないのは餘りに悲しい。スピノザと共に「永恆の相の下」に之を見て、ニイチエの様に「藝術と人生との両面に亘る一切の悲劇を哄笑」してやりたい。それで時だとか生死だとか運命の悪戯だとか言ふものゝ觸るゝ事の出来ぬ偉大なものが人生の（殊によき天分を抱いた人の）内奥にある事を悪魔に向つて誇りやかに教へてやりたい様な気がする。そして多くの哲理や教説は然か信ずる事の誤でない事を教へてくれる。然し、その人にどんな深い悟があらうとも斯く確信せんとする刹那に於て必や又心のどこかでは何者かゞ嘲り出す。そして何と云つても彼はもはや居ないのだ、死はヤハリ動きの取れぬ事實だと大聲を揚げる。そして心は何とも言へぬ悲しさに破れそうになる。が、又さればとて最早や全く彼が消滅したとは理性上にも思へなければ、感情上にも此を信するに忍びないそしてこうした入り亂れたアンチノミーの渦巻の中に心は悲しむ。そして人は時以上のものゝやうでもあり時以下のものでもある様な気がしじみとしてくる。そしていくら割つても割り切れない剩餘の様に、いくら探究しても探究し切れぬ謎が何等かの形で残る事は明に知り乍らも、又死の謎などゝ言ふ事は平凡な、又始終何等かの形で考へてゐる事であり乍らも、やはりこうしてはゐられぬ様な、もう一度考へ直して見ねばならぬ様な黒い嚴かな冷たい事實にいきなり打つつかつた様な気がする。少くとも私が

人の死を見る時にはいつもさうした感じに打たれる。そして其感
は去年の夏新聞紙上に「二青年詩人の死」と云ふ題の下に三宮朽葉、
今井白楊二氏が後者の溺れんするのを前者が助けんとして共々犬
吠岬の藻屑となつたと云ふ痛ましい記事を讀んだ時殊に深かつた
處である。或友人を通してたゞ懐しい人と云ふ事のみを耳にして
ゐて其作物に殆接する機會の無かつた白楊氏の事も去る事乍ら、
數年前より輕薄な現代日本詩人中稀に見る落付いた根柢と研究心
と純粹な心と敏感と眞摯との所有者たる事を明に示してゐる幾多
のなつかしい詩や評論に接しては前途に多大の期待を有してゐた
朽葉氏の死——殊に友人を助けんとする爲に招いた其不慮の死に對
しては殆人事とは思へぬ悲痛なる思に胸を亂されたのである。そ
して二人の死は其後長く私の色々の冥想と悲しみの種となつたの
である。さればこうした思を闊してゐる私に取つては今度兩氏生
前の多くの知己友人先輩、就中嚴父親縁者諸氏の眞情を罩めた追
憶文や其肖像や絶筆やなどを集めた立派な追悼録の出版に接して
どんなに嬉しく感じた事であらう。又兩氏の靈もいかに満足して
ゐる事だらうと思つた。時却と大海の波とは永に二人を奪ひ去つ
たにしても何等かの形に於て此等の惜しむべき人々を永遠化しよ
うとの誰しもの願が此集中に結晶したものであらう、中にはにやけ
た不眞面目な言葉や聯ねてゐる輕薄才子もあつたり、又上述の様
な深い問題に觸れて單に此を個人的の死としてのみ取扱はず人類
的世界的な見方の深い根柢から感味した様な人の殆無かつたのは
遺憾ではあるが、多くは彼等の單純な言葉の中にも言ひしれぬ感
情を罩めてゐるのが觀取せられる。平生には輕蔑すべき文章のみ

書く人でさへ誠に深い真情を吐露してゐるものもある。殊に朽葉氏の嚴君の回想などに至つては人の腸を斷つものがある。そして理解ある父君の温情が人に迫る。又色々の人が色々の見方を以て書いてゐるので（二氏の本質的永劫的な本性に就てはいろいろの人も深刻に書き盡してゐないのは残念ではあるが）浮世の人とその二氏の面影を思ひ浮べるには恰好のよすがとなる。殊に田代氏の筆などには短い句の中に朽葉氏の面目を躍如たらしむるものがある。筆者の名を擧げれば朽葉氏の父君道臣氏、白楊氏の妹婿山下市助氏を始めとして相馬御風、松居松葉、荒木郁、長谷川時雨、三上於菟吉、福士幸次郎、増田篤夫、坪内雄藏、谷崎精二、廣津和郎、秋田雨雀其他の數氏がある。二氏の思はぬ死に對して色々之感に打たれた人は私一人ではあるまい。殊に詩のまじめなる愛好者の中には其感の深い人が多い事であらう。さう云ふ人は是非一展は此書を讀かれん事を希望する。そして儂れた人の天折をもう一度惜しんで、神や來世を信ずるにせよ信ぜぬにせよ、彼等の靈の冥福を心から祈つてほしいと思ふ。此書は非賣品ではあるが發行所に其旨を通ずれば其分配に與れぬ事は恐らくあるまい。もしそれに與れなければ其便宜を他の人にも與へうる襟故人の爲に發行者に切におすゝあする。發行所東京市牛込區津久戸町三十一番地三宮今井迫棹録事務所。（岡本春彦）

佛教美術概論

小野 玄 妙著

日本美術史研究が、今日に至りも、ほ未だ極めて不備、不徹底にして、殆ど一の推獎に足るものあるを見聞せざる所以は、一は其

學者自ら「美術史」の意義を自覺せず、美術史の研究、美術品の研究、美術家の研究、及び其他の美術史的文献研究の意味の區別と關係に對する嚴肅なる美學上の考察、知見無く、唯だ漫然として之れに従事するもの多きに本づくに似たるも、一は又、諸般の美術史的文献學の貢獻渺々しからざる爲めに、眞の美術史そのもの、研究を以て任ずる者にし、尙ほ已むを得ず自家の本務を暫く捨てて、此方面の研究に多大の勞力を裂けるに因ること多きもまた疑ふを得ず。美術史的文献學の振興は、美術史の意義の正しき理解の如く、我邦斯界の急務たり。一たびこのことを知り、轉じて我邦美術史に於ける佛教美術の位置を知り、更にこの美術の研究が、如何に佛教そのものに關する智識を要すること多きかを知り、しかもこの種の文献にして、學者の参照に手頃なるもの從來殆ど絶無なりしを知らば、吾等の茲に落手せる小野氏の著書が、いかに出でざるべからざる時に出たる、出ざるべからざる著書なりしかは何人と雖多言を俟つて初めては知らじ。吾等は著者の卓見と意義殊に深き事業に對して深大なる敬意を惜まざらんとす。書を見るに、寺院の諸建築、建築内の安置物、佛像、諸尊像の意義及び形式の類別、造像の方法、佛畫繪佛、佛物、法器、僧具等極めて廣き範圍に亘りて、しかも平易を旨として説かれたり。頗る學者の参照に供すべし。必ずしも完備を以て目すべきには非るべきも、それは著者其人が既にその卷首に於いて明かに自ら注意せる處他日の大成も又著者自らの聲明せる處なり。然らば吾等何をか更に食らん。空谷の響音にも應ふべきこの書が日本美術史研究者並びに、後のこの種の文献學者に對して直接間接に大なる利益を與